



# 水辺のひろば

No.19  
2014年4月 1日発行



▲堤のすぐ下で作ったビオトープ ▲環境調査も農業体験の大切なプログラム

**農家組合長の一言が 耕作放棄地をビオトープに**

竹俣活性プロジェクトが主催している農業体験交流会は、人と農と食の出会いを目的とした事業です。春は田植え体験、夏は案山子作りと生き物観察会、秋は稲刈り体験と、四季を通じたイベントで、加治川ネット21も講師やスタッフを派遣し、支援をしています。そのイベントが、主催者も考えていなかった新しい副産物を生みだしました。

昨年7月、上三光農家組合や一般市民、子供たちが参加して、当会が講師となり、田んぼ周辺の生き物調査や上流のため池の調査を行いました。その時に参加していた若い農家組合長さんが言った「ため池の下にビオトープ作っていい？」という一言。それがきっかけで、耕作放棄地をビオトープに変える計画が動き始めました。早速、11月、重機2台により、あつという間に大きな池ができました。

さて、ここからが当会の出番です。今後どういう風にしていくのか、どういう空間を保っていくのか。幸い当会にはビオトープ管理士もいますので、そういう人の力も活かしながら、地元の人と一緒に多様な水辺空間を作り上げていこうと思います。

## こんな場所発見

### パワースポット

#### 菅谷のお不動様

市内菅谷にある菅谷寺かんざいじは、本尊が不動明王であることから、菅谷不動尊の名で知られています。日本三大不動の一つともいわれていますが、それを名乗っている不動尊は日本各地にあり、いずれもその出典ははっきりしていません。

三大不動に入るかどうかはともかくとして、近年ではパワースポットとしても紹介されています。山門には両側に仁王像。全身に紙つぶてが貼り付いており、驚く人もいますが、これは昔、病氣平癒を願って自分の体の悪い部分を仁王像に重ね合わせ、紙つぶてを吹き付けた信仰の跡です。山門を過ぎると境内が広がります。



歴史を感じる菅谷寺山門

本堂は御開帳の時以外は、中には入れませんが、広い境内をゆつくりと歩いて回るもよし、七観音回りなどを楽しむもよしといったところ。

菅谷寺は、源頼朝の叔父の護念上人が開いた寺ですが、こんな話が伝

わっています。

護念上人は、平家に追われた時、比叡山無動寺にあった不動明王の御頭のみを笈に入れて逃げ延び、諸国を行脚していました。菅谷の地を通りかかった上人は、笈を松の木にかけて休憩しますが、いざ立ち上がるうとした時、笈が重くなり、動かすことができませんでした。その時、笈の中から光が差し、その方向に紫雲がたなびくのを見てこの地に開山することに決めたのだそうです。笈に入れて守り続けた御頭が菅谷寺の御本尊です。

御本尊が祀られていた伽藍は、その後落雷により消失したのですが、不思議なことに、御本尊は「みたらせの滝」にいた多くのタニシに守られ、無傷で消失を免れたと伝えられています。

## 寄稿 殿様街道てくてく旅 ⑫

### 奥羽街道に行く

宇都宮は、目隠して何も知らぬまま連れてこられたら、東京かと思ってしまうほどに大きな都会だ。今までの道中のような厳しい山越えもなく、次第に江戸に近づきつつあることを実感する。

喜連川、氏家と歩き続けて夕方、やっと宇都宮に着いた。夕食は無論、餃子のまち宇都宮の餃子を堪能。翌日の行程は2km弱で、商店街を覗きつつ数分歩いて宇都宮裁判所前で終了。簡単な壁と屋根をくっつけただけの小さな屋台がより集まった屋台横町、パルコの1階の一角に店を構えているテナント・・・としてしか見えない交番、若い美女が横たわる水着の大看板、建築中の高層ビル。わずか2kmの間に目に入る刺激の数々、まさに都会だ。

さて、ノルマ達成の後はお楽しみの観光。醤油で財を成した広大な敷地の旧篠原家住宅、昭和7年に建てられたロマネスク様式の松が峰教会（うかつに覗いたらミサの最中だった）、岩山に開けた無数の穴に仏を掘り出した長岡の百穴古墳、そして巨大な大谷観音、最後に日光東照宮と、今回も見応えのある贅沢な旅をさせてもらった。

次回からはいよいよ日光街道。どんな風景、どんな出来事に出会えるだろうか。近づく江戸に期待が膨らむ旅が続く。(恵)

(次号へ続く)

## 《編集後記》

今年は何年にもない雪の少ない冬でした。いつからかよく覚えていませんが、田んぼでえさを啄む白鳥の姿が冬の風物詩となりました。雪が少ない今年、毎日のように間近に白鳥の姿を見ることができ、自慢の一つとなっています。私の家の近くに弁天瀧という瀧があり、近年、たくさんの白鳥が来るようになり、観察台ができて、小学校では保護活動が進められています。白鳥がたくさん来るようになり、白鳥のフンによる水質汚濁が進んだためか、それともブラックバスのせいかわかりませんが、白鳥のハスがすっかり姿を消してしまいました。

環境は微妙なバランスで成り立っています。特定のものを過剰に保護したりせず、しっかりと視点で環境を見る目を持ちたいものです。(T・W)

## NPO法人加治川ネット21の紹介

設立	1996年11月、2003年5月法人化
活動目的	21世紀を生きる子どもたちによりよい環境(自然、伝統、文化)を残し、伝える。
主な活動	水と親しむ水辺の大楽校、生き物調査、小学校環境学習支援、川辺や町並み散策、手前みそ作り、シンポジウム開催
受賞歴	環境大臣表彰、新潟県環境賞、「日本の水をきれいにする会」会長表彰ほか
年会費	法人会員10,000円、個人会員2,000円



あじのある話

- かかさ 「とおちゃん、畑にオラの上着見かけなかったけー。」
- ととさ 「いやー、あじかけなかったなー。」
- かかさ 「赤い上着なんだともさー、風で飛ばさったろかー。」
- ととさ 「まあ、あじこと無いさー。」
- かかさ 「ポケットにおちゃんの財布も入れてたんさねー。」
- ととさ 「あちゃ、おおごとしたなあー。」

※「あじかけない」は「あずかけない」とも言い、気がつかない、思いもよらない、「あじことない」は、心配いらぬというような意味で使います。

環境豆知識 Vol.17 西ノ島新島

3年前、東日本大震災が発生し、大地震の後には数年以内に近隣の火山が噴火することが度々あると報じられました。それに当たるのか、昨年11月、小笠原諸島の西側130km離れた西ノ島の傍で40年ぶりに海底火山が噴火し新島ができました。西ノ島は大きな海底火山であり、海面に出ているのは頂の一部に過ぎず、海中の山塊としては1,000立方kmを超えます。富士山の山塊が550立方kmなのでその大きさがうかがえます。

この西ノ島の南500m付近に現れた新島は、活発な噴火活動により旧島と接合し、噴火前と比べ2.5倍の面積に広がりました。高さも60mを越え、数十年は侵食されずに島として残るものとされています。

西ノ島は小さい海洋島なので生態系は貧弱で植物では、スベリヒユやヒルガオ、オヒシバ等が数種、動物はカツオドリ、アジサシ、ネツタイチョウやアリ、クモ、カニなどが観測されています。尚、この近海に行くには小笠原海運のクルーズによるツアーが過去にあったようで、噴火が落ち着けば新島観測ツアーが企画されるかもしれません。

**手作り豊かな食生活を 恒例の手前味噌の仕込み**

当会の春の恒例行事となった手前味噌の仕込みが、3月8日、健康プラザしゅうんじで開催されました。

当初、定員40人で募集した事業でしたが、初の紫雲寺地区での開催ということやリピーターの増加ですぐに定員オーバー。キャンセル待ちが続出したため受け付け人数を増やし、参加者は過去最高の約70人になりました。

今年も指導は藤田味噌糖店の藤田さん。茹でた大豆と糶、そして個々に用意したこだわりの塩を使って味噌作りの開始です。こねて、こねて、またこねて。最後に樽に納めたら仕込み完了です。

**参加者の声**

味噌が食べられるようになるのは、夏を越してから。カビも生えることないうまくできるかどうかは神のみぞ知る？どんな味噌が出来上がるか今から楽しみです。

いつも楽しく参加させていただいています。

手前味噌の会への参加は、私にとって四季を感じる事ができる風物詩となつています。友人と会話を交えながら味噌を仕込む時には、もう春であることを感じ、暑い夏には天地返しをし、秋には味見に味噌を試し、冬には美味しい味噌汁をいただき次回の案内を



安心安全な手前味噌は、今年も人気上々



「おいしく育て」と見守る高橋さん

見ると、ここ数年、そんなふうには味噌作りを楽しんでいます。

毎年、美味しい味噌をいただけることに加え、その時々楽しい思い出も出ただけ「手前味噌の会」がずっと続くことを願っています。(Y)

高橋さん曰く「菅谷地区は、果物栽培に最も適している土地です。太陽の恵みが得られる南斜面で、夕風が吹き、日較差の多い中山間地雪が多く空気が澄み、寒暖の差のある土地。猿害もあって大変な場所ですが、この果物は最高です」と。この自然条件から、「いかにして自然の力を引き出すか、それが栽培の醍醐味です」とも話します。

「自然と人が出会い、うまくつきあうことで自然が恵みを分けてくれます。果物はまさに自然の贈り物です」と高橋さんは果物作りに精を出しています。現在は約80種の果物を栽培していますが、まもなく100種になる予定だそうです。美味しさを直接届けたい、お客様の声を聞きたいと、平成3年に自社直売所を開設し、お客様が食べたいという果物を作るようになり、種類が多

子どもの感性が訴える 小学生環境学習パネル展開催



22団体のパネル展がずらり

加治川ネット21が主催する「小学生による環境学習パネル展」が、11月中旬にイオンモール新発田を会場に開催されました。

今回が7回目となるパネル展は、新発田市、聖籠町の小学校に加え、胎内市の緑の少年団やイオンチアーズクラブなど全部で22団体の参加がありました。その作品の一つ一つを見ていくと、子どもの感性の高さに驚かされました。

新発田市内の御免町小学校は校区内を流れる新発田川を調査しています。川に生息するカマツカ、ヨシノボリなどの魚類を観察し、イラストを描き、大きさや特徴を説明。ブラックバスやザリガニなどの外来種については「ほ

か魚を食べつくしてしまいます」「メダカを食べてしまします」など、ほかの生物への影響も説明しています。川の役割を家族から聞き取りし、昔は川を使って荷物や木材の運搬をしていたこと、水を利用するために川へ下りる階段があることなどを学んでいます。

本田小学校は、地域の特産「梅」を取り上げました。4月の開花、花が散り、緑の葉の中に梅が実を付けた後、梅組の指導の下に収穫、ジュースや梅干し作り、そしてそれを学校や地域の方へプレゼントするところまで、半年かけた学習の成果を、笑顔の写真とともに、パネルに仕上げていました。

聖籠町の亀代小学校は、「亀代の自然のよいところ」を見つけているのが学習テーマ。海岸線に松林が続くことから、はじめに松林の役割、その様子などを調べています。

海岸に植えられているのは砂防林で保安林の一つ。海から飛んでくる砂を防ぐための松林です。そこから保安林



赤谷小学校はホタルのすむ水を調査



五十公野小の自然のキーパー新聞

の種類を紹介しています。水不足や洪水を防ぐ水源かんよう林、魚の棲みやすい環境作りの助けをする魚付き林、名所や古くからの景色を保つ風致林のほか、蛇行目標林、防霧林なども説明しています。そのほか、松はだれが植えたのか、枯れた松があるのはなぜかなど、植樹や海岸清掃に参加しての感想も紹介しています。

紙面の都合で全部は紹介しつくせませんが、ほかにも牛乳パックのはがきづくり、食のリサイクル、先輩児童が名付け親となった国有林内の「まぼろしの清水」、珍しい米や米粉からできるお菓子などの調査、水俣病、そして身近な川の生き物や水質からみる環境など、環境の切り口はいろいろでした。

子どもたちは純粋な「目」で環境をとらえ、感じています。一人でも多くの大人が持ち続けてほしい「目」です。

宝物みつつけた

直売で旬のおいしさを届ける こだわり農園の果物

昭和51年、農業高校卒業後、長野県で果物栽培の研修を受け、家業のぶどう農家を受け継いだ菅谷の高橋健太さん。高橋さんの農園は日本一小さい山脈・櫛形山脈の南斜面にあります。

高橋さん曰く「菅谷地区は、果物栽培に最も適している土地です。太陽の恵みが得られる南斜面で、夕風が吹き、日較差の多い中山間地雪が多く空気が澄み、寒暖の差のある土地。猿害もあって大変な場所ですが、この果物は最高です」と。この自然条件から、「いかにして自然の力を引き出すか、それが栽培の醍醐味です」とも話します。

「自然と人が出会い、うまくつきあうことで自然が恵みを分けてくれます。果物はまさに自然の贈り物です」と高橋さんは果物作りに精を出しています。現在は約80種の果物を栽培していますが、まもなく100種になる予定だそうです。美味しさを直接届けたい、お客様の声を聞きたいと、平成3年に自社直売所を開設し、お客様が食べたいという果物を作るようになり、種類が多